

意見陳述書

2024(令和6)年6月18日

原告 須藤昭男

私は、原告共同代表の須藤昭男といます。このたび、原告を代表して裁判長のまえで、意見陳述できますことを感謝しております。

I) 私と原発のことを申し上げさせていただきます。

私は福島県会津の出身です。東京電力福島第一原発の立地しております浜通り地方より西に約100キロ離れた会津地方の農林業の家庭で生まれ育ちました。会津は1000円札の肖像・野口英世の生誕地であり、明治維新、戊辰戦争では白虎隊の活躍、激しい戦闘が行われた地です。子どものころ「家を建てようとしたら戊辰戦争の不発弾がでてきた」という話を聞いたことがあります。先祖は戊辰戦争に従軍、戦死しており「郷土愛と義に生きる」ことの大切さを教えられ育ちました。私は牧師ですが、キリスト教の背景は全くなく、仏教儀式には極めて熱心な家庭環境のなか大学進学まで育ったのです。

学生時代の1960年代は、池田内閣の所得倍増計画で世の中は沸いていました。新幹線計画・高速道路の整備と経済成長の著しいなかでした。そのような中で、人間の幸せとは何かということを実際に考え、経済が豊かになることが人間を本当にしあわせにするのか、議論し模索追求するなかで行き詰まり、絶望のどん底でキリスト教と出会いクリスチャンになりました。

大学卒業後一般企業で働いたのですが、自分の生涯をキリスト教伝道に用いて人のため、世のために生きようと牧師の道を志し、学び、備え、52年前の1972年4月8日愛媛県松山市にキリスト教会設立のために来ました。愛媛県や松山市には親戚や知人は無く、住民登録を済ませ城山の天守閣を見上げたとき、言い知れない孤独を感じたことを思い出します。そのような中で牧師生活、キリスト教伝道活動を陰ながら応援しサポートして下さった夫妻がありました。その方は東京電力の原発部門の重責を担っておられる方でした。また教会によく通い、原発に興味をもち、将来原発で働くことを夢みている青年がいました。彼は今も「夢が叶った」と喜んで伊方原発で働いています。私は、このようなことから原発には何一つ違和感もなくむしろ原発は素晴らしいと思っていました。

II) 故郷福島での未曾有の原発事故が起こったのです。

テレビから流れる悲惨な映像と東北訛りで叫ぶ悲痛な声、何が起きているのか見当がつかせませんでした。マグニチュード9.0という未だかつて経験したことのない大地震が東日本を襲い、甚大な被害が発生、東京電力福島第一原発では筆舌に尽くし難い事故が起こっていることを知りました。それは

- ※3月12日 1号機 メルトダウン 水素爆発
- 2号機 メルトダウン
- ※ 14日 3号機 メルトダウン 水素爆発
- ※ 15日 4号機 検査中で停止していたが 水素爆発

事故が起きたとき、現場責任者であった吉田所長は、今まで経験したことのない原発事故の恐ろしさを調書で「2011年3月15日早朝、完全に燃料が露出しているにも関わらず、減圧もできない、本当にここだけは思い出したくないところです。死んだと思ったんです、東日本壊滅だ。」と語っています。このことを記した吉田さんはお亡くなりになっています。遺言のように記したこの出来事の事実から事故の凄まじさをしっかりと受け止めたいと思います。「東日本は壊滅だ」北は盛岡、南は東京を超え神奈川に至る半径250キロ圏の避難を意味し、国家存亡の危機を意味しています。

この危機を救ったのが2号機・4号機の奇跡と言われる出来事です。2号機は、メルトダウンにより格納容器の圧力が上昇し、格納容器が爆発して大量の放射能が放出されることが懸念されましたが、格納容器の圧力抑制室の一部に亀裂が入ったようで格納容器の圧力が抜け、放射性物質の爆発的大量放出を免れたのです。

さらに4号機も奇跡的に爆発が免れている事を知りました。4号機は大量の使用済み燃料を保管していた使用済み燃料プールの水が蒸発して、使用済み燃料が溶融し、半径250キロ圏の避難を要する危機・東日本壊滅が懸念されましたが、たまたま原子炉キャビティに残されていたプールの水が蒸発して、使用済み燃料プールに流入したため危機を免れることができたのです。この4号機の奇跡を樋口英明元福井地裁裁判長は「凄まじい奇跡、神様を信じない人でも信じたくくなるような奇跡です。」(2020年12月10日京大の講演会で)と語り図解しながら説明しています。

このように、奇跡が起こった東京電力福島第一原子力発電所の事故でしたが、福島には甚大な事故被害をもたらし、今でも筆舌に尽くし難いものがあります。私は、「福島を繰り返すな、福島に流された血と涙を忘れるな」この一つの願いで原告として今日まできました。

薦田伸夫弁護士より、2024(令和6)年6月18日が結審の見通しとなったとのことで、最後の意見陳述を求められ「はい」とお引き受けしたのです。しかし、「自分は福島県出身者として、あの悲惨さを、この愛媛に繰り返してはならない」と伊方原発運転差止と廃炉を叫び、被災地を視察、避難された方々の仮設住宅を訪問してきました。それがコロナで中断、久しく被災地や被災者の方々にはお会いしていません。このままで最後の意見陳述に臨むことは申し訳ない、もう一度あの被災地をこの足で踏み、この目で見、「助けてくれ」「待っている」そう叫びあいながらも放射能にさえぎられ多くの方が無念の死をとげた請戸の浜に立ち、最後の意見陳述に臨みたいと思いました。

去る5月7日に松山を出発、東京電力福島第一原発の被災地を訪ね、この足で踏み、この目で見、耳で聞いたことを申し上げたいと思います。

原発事故が起こったとき、福島県は県政史上初めてとなる避難命令を出すのです。*東京電力福島第一原発3キロ圏内の住民に避難命令を出します。

3キロが10キロに、10キロが20キロにと拡大して大混乱の中に避難してゆくのです。そのような事故が起こったとき、「現地の人はどうな気持ちであっただろうか」と知りたく思いました。失礼になってはならないと言葉を選びお話しているうちに、重い口を開いてくれました。「あのときは、何がおこったか見当がつかなかった。戸惑ったというのが正直なところだ。」「え！なぜ」

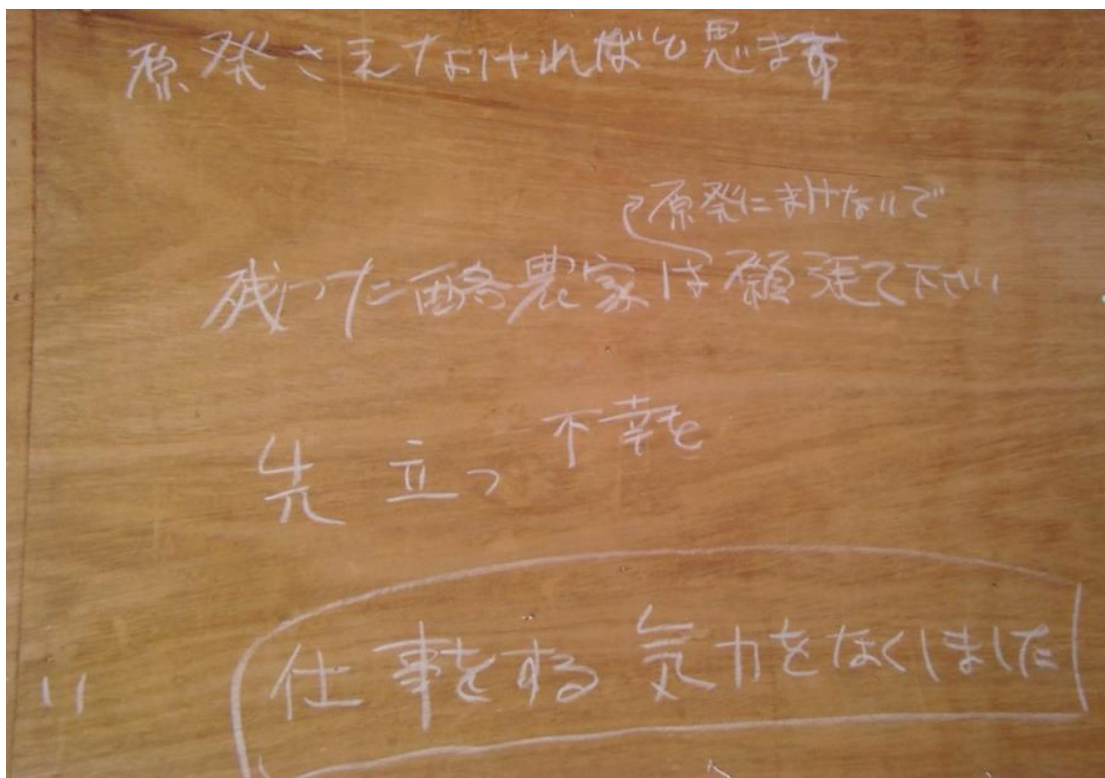
東京電力が立地住民に説明し続けていたことは、

※原発は絶対に安全です。

※原発は五重の壁（燃料ペレット・燃料被覆管・原子炉圧力容器・格納容器・外部遮へい壁）で守られており絶対に安全です。

この説明を繰り返し聞かされていたのです。そのうち原発は明るい未来のエネルギーであり、事故などおこらない、「原発安全神話」が浸透していたのです。福島原発事故、悲しく惨いできごとは枚挙にいとまがありません。

◆この写真をみてください。酪農家の方が牛小屋のベニヤ板に「原発さえなければ」と書き残し妻子を残し自死したのです。



◆これは、牛たちは飼い主が避難、食べ物がなくなり、牛小屋の柱を食べ飢えをしのごうとしたのです。力尽きて餓死、その骨です。



避難指示区域外から各地に移り住むことを「自主避難」といいますが、自主的に、好きで避難しているのではないのです。「見えない放射能の恐ろしさに追い出された。」という事実を忘れないでください。

福島県の発表によると2023年12月現在

※県内外への避難者は2660名 ※直接死・関連死 3945名

※悲しいことに自死者は119名にのぼっているのです。

避難先での慣れない生活をしながら死んでいった人、放射能への無理解のためにいじめなどで今も苦しんでいる人々があるのです。

Ⅲ) 復興の声が聞こえる中での被災地の実態は

32回東京オリンピックを前に(2020年の予定、コロナで一年延期)復興・再生のかけ声が鳴り響いていたことです。復興、再生は今も聞こえてきます。

「福島民友」という新聞は、震災・原発事故から13年を迎え「避難12市町村の首長に聞く」を企画していました。行政のトップに相応しく厳しいなかにもビジョンを語っていました。誰しも復興を願わない者はいません。しかし福島を訪れたとき、復興とその現実の厳しさを見せ付けられました。

私を案内してくれた方が「是非、見てもらいたいところがある」といってJR常磐線双葉駅まえに案内してくれたのです。この場所は復興オリンピックの聖

火ランナーのスタート地点、復興のシンボルと位置付けられた場所です。JR常磐線双葉駅舎と周辺はまばゆいばかりに実に立派なもので驚きました。

しかし、車で2~3分しますと景色は一変しました。荒涼たる風景なのです。朽ち果てた家、うっそうとした中に見えてきた大きな建物「あれが双葉高校ですよ」、当然生徒さんの姿などない。住宅街と思われるところを少し走ると「見てください、あれが双葉病院です。避難できなかった多くの入院患者さんが悲惨な死をとげたのです。」病院の建物が無残な姿をさらしていました。「これで何が復興だ」と呟いた知人の言葉が忘れられません。声高に聞える復興の陰に、現実を見せられました。13年経過してもこれが、原発事故福島の実態であり、この現実には原発が事故を起こすとどうなるのかを無言のうちに語りかけ警告しているのではないのでしょうか。

復興と言う陰で

① 問題の根源、原子炉の廃炉はどうなっているのでしょうか。

2024（令和6）年3月16日の「朝日新聞」は、「示せぬ廃炉後、たまる廃棄物」という見出しが大きく踊っていました。福島第一原発事故から13年経過した今も廃炉の見通しは立っていないのです。複雑に損傷している原子炉よりデブリを取り出す作業は容易ではありません。仮にデブリを取り出せたとしても何万年も保管しなければならないのに何処に、どのように保管するのでしょうか。これからの将来世代の人々に対して無責任というものではないのでしょうか。原発に経済効果などありません。原発は、人々を救うのではなく人々を苦しめているのです。

② 復興と言う陰で

膨大な汚染水問題はこれでいいのでしょうか。汚染水ではない、ALPSで処理された処理水であるといっていますが、処理したと言いましてもトリチウムは取り除くことができません。ヨウ素129、ストロンチウム90、炭素14、セシウム137など原発由来の放射性物質が含まれているのです。

試験操業を続けながら漁のできる日を待ちわびていた漁師さんたちとの約束を思い出してください。「関係者の理解なしには、いかなる処分も行わない。」と約束を結んでいたのです。しかし漁師さんたちが強く反対したにも関わらず、2023年8月海洋放出を強引におこなったのです。「東電はウソを言っている」と言いこの世を去った浪江町元町長馬場さんの言葉を思い出したことです。長年続けてきた生業の漁師、耐え待ち続けた12年間を踏みにじりIAEA（国際原子力機関）を錦の御旗のように掲げ海洋に流す行為は許されるものではないと思うのです。

③ 復興と言う陰で

子どもや青年の甲状腺ガンの深刻な問題を見落とさないでください。福島第一原発事故の後に、福島では「甲状腺ガン」になり人生を変えざるを得なかった子供たちがたくさんおられるのです。原発事故と甲状腺ガンの関係を問題に

取り上げるマスコミは少ないのです。

子どもの甲状腺ガンは年間100万人に1~2人しか発生しないのですが、福島県では2011年3月の原発事故後38万人の子どもから300名以上の小児甲状腺ガンが発見されているのです。この数字は通常のガン統計をもとに推計した有病率とくらべると「数十倍高い」のです。

復興一色にそまるなかで「甲状腺ガンの事実は復興に水を差す」存在として扱われているようで、新聞やTVで取り上げられることはあまりありません。メディアが「甲状腺ガンが増えている」と報道しただけで、苦情やバッシングが殺到するそうです。甲状腺ガンは子どもたちの夢を奪い、保護者を塗炭の苦しみに追いやっています。

IV) 福島に払われた犠牲、流された血と涙を無駄にしないでください。

この事実と原発の危険性をどのようにしたら一人でも多くの人に、また裁判官の方々に知ってもらえるかと思い悩み2023(令和5)年が暮れたのです。

ところが2024(令和6)年の元日に能登半島大地震がおきました。これは能登半島の人々には甚大な被害をあたえました。また佐田岬半島付け根に伊方原発がある愛媛県と多くの国民に原発の危険なこと、3・11をよみがえらせたのではないのでしょうか。

東京電力福島第一原発事故の悲惨な事実は、多くの人が今も苦しみ故郷を失い、青年たちは夢を奪われている事実の根源を考えてください。

それは、今のことしか考えない、自分のことしか考えない、お金のことしか考えない愚かな施策の結果と言えるのではないのでしょうか。最大に価値あるものは、ご存知のように一人の人格権です。それは地球より重いのです。原発によってこれ以上血と涙が流されないために司法判断を下して下さることを切にお願いし、私の陳述を終わらせていただきます。

まことにありがとうございました。